スリー ハンドレッドクラブの大平さん

五島　昇

訃を聞かされたとき、私の裡を多くのものがよぎりました。それも公人としてよりも、私人としての印象が強く鮮やかに残ります。ですから、あのように劇的な死を遂げられたにもかかわらず、いまだに故人となられたことが信じられません。

死を迎えることに公私の区別はないはずですが、公人としての死は受け入れざるを得ないとしても、私人としての鬼籍を肯ずることが、私にはどうしてもできないのです。従って大平さんとの関わりを誌すとしても、思い出の糸を手繰るというのではなく、現世での触れ合いをそのまま綴るつもりで述べてみたいと思います。

一点に絞ります。場所はスリー ハンドレッドクラブ。茶系で統一した服装で大平さんが現われます。例によって帽子は被っていません。キャディーマスター室の前にどっかりとあぐらをかいて座りこみ、バッグの中のボールをひとつひとつゆっくりと点検。起き上がって大きく伸びをひとつ。細い目を一層細くしてにこやかに、

「さあ、行きますか」

一番のバックティーグランドでスパイクシューズのまま正座。笑みの消えない顔で遠方をじっと見やります。真剣な顔に戻りつつ第一打、チョロ。途端にその場に平伏して、

「ああ、ご先祖に申しわけない」

スリー ハンドレッドルールのモリガンルールに従って再度ティーショット。フェアウェイに二百ヤード。破顔

一笑して、顔から目がなくなります。

「未だご先祖もわれを見捨てず、か」

そしてグリーン上。同伴者がスリーパット。

「前車の轍を踏まず、と」

口の中でモゴモゴいいながら自分もスリーパット。カップからボールを拾いながら、

「仏の顔も三度までだ」

こうして、にこやかに楽しそうに、そしてある時は真剣に、時折、周囲に聞かせるでもない諺をつぶやきながら、恬淡とラウンドします。ハーフラウンドで五十も切ればご機嫌ですが、特にスコアにこだわっている風にも見えません。とにかくゴルフが好きです。大雨の日に一人でふらっとみえて、ズボンの裾をまくりながらプレーしていたことも、正月二日に静養先の伊豆からわざわざ茅ケ崎までとんできたことも、また多忙な政務を割いて僅か六ホールを回るだけにきたことも、ありました。そして、メンバーの誰とでも気軽にプレーを楽しまれ、また誰からも誘われていました。精神的に解放される場にあってはじめて人間の本質的なものが現われるのだとしたら、大平さんが極めて豊かな人間的魅力を備えていたことを、私ならずともクラブのキャディーなら誰でもが、よく知っていました。

政治家大平正芳としての業績は、歴史が十分に証だてることでしょう。ですからこれについては何も記すつもりはありません。ただ、政治家としての大平さんは、私の胸に、その風貌とは逆に、風のなかを全速力で駈け抜けたという感を遺して去りました。戦後政治史のなかを、大平正芳という一陣の爽やかな風が吹きわたったと思うのです。合掌。

（東京急行電鉄社長）